

2005年8月16日の宮城県沖の地震の余効変動

Postseismic crustal deformation of the off-Miyagi earthquake of August 16th, 2005

水藤 尚 [1]; 小沢 慎三郎 [1]; # 今給黎 哲郎 [1]
Hisashi Suito[1]; Shinzaburo Ozawa[1]; # Tetsuro Imakiire[1]

[1] 国土地理院
[1] GSI

国土地理院のGPS観測網GEONETでは、2005年8月16日に発生した宮城県沖の地震(Mj=7.2)に伴う地殻変動を観測した。また、その後の余効変動も小さいながら観測された。本震発生後約2ヶ月間の余効変動データにもとづいてプレート間における滑り分布を推定し、本震震源域の南側を中心として余効滑りが起きていると見られることを昨年10月の地震学会および測地学会で報告した(図の(1)の時期)。その後の観測では、11月頃から余効変動と見られる非定期的な変動成分は非常に小さくなっていったが、12月2日に発生した余震(Mj=6.6)によりまた一次的に活発化した。この余震以降に見られた地殻変動から推定された余効滑りの領域は、本震の滑り領域よりもやや北側にも広がったように見える(図の(3)の時期)。2006年2月初めの時点では、非定期的な地殻変動は再び小さくなっているが、余効滑りが終息したかどうかの判断には、さらに数ヶ月程度のデータの集積が必要と思われる。

